

石見銀山での世界的にも前代未聞な 2 日間に及ぶワークショップは、大成功のうちに幕を閉じた。パリに本部を置くユネスコの、まさに「世界初」のワークショップ。

締めくくりの夜（酔っぱらった私は、ほとんど眠っていたのだが・・・必死で考えた）にも申しあげたことだが、環境省顧問・竹内佐和子さんの強烈な「疑問符」を、その後も何度か反芻した。おおよその「大構造（テーマの俯瞰）」が見え、それに応じた「マイクロな事実」も頭の中から取り出すことができた。

まず、第一のテーマ「都会で使えないと、意味がない」。  
イギリスではじまり、アメリカで巨大化した「資本主義・200 年の常識」を覆すインパクトがあるのか、という問いである。

ある。ありすぎるほどある。それはどういうことか。

産業革命といってもよいし、近代ともいってよい、この 200 年余り。その前の中世と呼ばれる時代、大多数の人は「地方」に住み、都会に住むのは「王様とその世話をする人」くらいだった。それが一転。都会が田舎の人を、どんどん都会に向かわせた。

ここで大切な点は、みんな喜んで行ったということだ。それはつまり「100 パーセント都会の方が、都会暮らしの方が高い」と信じたからだ。逆にいえば、「100 パーセント地方はだめだ、住むにあたいしない」といわれてきたのだ。

200 年も言われ続けると、太古の昔から、みたいな感覚になる。

日本はどうか。近世と呼ばれる江戸時代（鎖国=100 パーセント日本国内で自給自足）から明治維新・文明開化（欧米の文化・科学技術とその学問の体系を学び、取り入れること=文明だったわけだ）から、200 年弱。第二次世界大戦・太平洋戦争という「近代型都市のストックの完全な消滅=リセット」を経て、戦後はもっと「欧米に追い付け追い越せ」を、言い続けた。

ヨーロッパよりはるかに急進的で、はるかに「全員右向け右の資本主義化」を貫いてきたのだ。しかも今、まだそれは続いている。地方の若者のほとんどは、東京に行って就職している。

だから石見銀山で「東京から地方にやってきた若者」がこんなにいることは、ふつう、信じられないことなのだ。

スローフード・反アメリカ型・ファストフードの国・イタリアの「フィレンツェと、そこから車で 30 分のグリーンツーリズムの村」とは、「傾斜角度」が違うのだ。

ほとんど「ロッククライミング」なのだ。アイガー北壁を登ってきた「なんてことない若者」が頂上で村をつくっているようなものなのだ。

都会人そのものである彼らの中に、モデルがないはずがない。

あえていわせてもらえば、それが、SATOYAMA Capitalism だ。

もうひとつのテーマ、「松場さんは、都会を敵視していた、対立構造では問題は解決しない」。

ほとんどのことは、前のテーマで述べた。別の、実に日本らしいアプローチでもう少し深めてみたい。

日本人は、いわゆる脳以外の体、土地から果ては木や石に至るまで、そこにあるあらゆるものに「記憶」が残ると今も信じているし、実際、よく「その記憶」を思い出す。現代的に「遺伝子の記憶」などと、よく会話の中でも、口にしている。

具体的な「記憶」を書こう。

松場さんは、元「銀山の呉服屋」だった。明治以降「呉服屋（元々は中国の呉の国あたりではやったファッションだったのだろう）」になっただけで、元は実質「服屋」。婚礼衣装から銀山工夫の作業着から普段着から、風呂に入ったあとの浴衣まで、全部同じ構造だから、今でいえば「ユニクロ」である。ヨーロッパのグローバル企業、H&M、ZARA といいかえても良い。

それが今、自然素材で「縄文の貫頭衣」のような最新ファッションをつくる群言堂である。すごい「記憶」だ。「元都会派」の記憶まで、そのまま残っている。

中村さんはどうだろう。

その昔、美濃の国（今の岐阜県）から役人として銀山にやってきた有能な官僚（そういう人は全員、階級が「武士」だから戦争していたか、三銃士みたいだったのか、と思われるかもしれないが、いわゆる「能吏」である）がいた。

中村さんは、その能吏が美濃から連れてきた「刀のつばをつくる職人兼デザイナー」である。義肢義足の会社、日本の先端技術メーカーの遺伝子、である。

ここで終わると、オカルトみたいに聞こえるだろうが、まだ続きがある。

「中村さんが地域で一番古い銀行の建物を移築した『中村館』の 2 階のコレクション」にも「中村さんが経営する、実質上のゲストハウス『ゆずりは』のダイニングのショーケース」にも「刀のつば」が飾ってある。つまり「本当の記憶」なのだ。

末っ子だった中村俊郎さんは、大森町の収入役だった父親（50 代だというから、当時の感覚でいえば祖父・長老である）から、何度も何度も、その話を聞いていた。

だから、「世界遺産」にしたいと言い出した。

だから今回も、表に陰に、あんなに頑張ったのだ。

ここは完全に、「世界的鉱山の町という都会」と、「銀がなくなったあとは、まわりの里山・里海資源を活かすムラ=地方」の「ハイブリッド」なのである。

登美さんが流した涙。中村さんの絶えることのない微笑み。

これが「世界の 22 世紀の扉（10 年以上食い込んでいるのに、いつまでたっても始まらない 21 世紀、といってもよい）」が開かないわけがない。

もちろん遠く南米にも、この「優しい日本人の資本主義」は上陸するにちがいない。かつて日本の中国地方から数多くの日本人が移民としてわたり、友情を築いたように。